

## 交通科学博物館、交通博物館

動いているSL

佐々木 享

### 交通科学博物館

東海道新幹線が東京—新大阪間の営業を開始したのは1964年10月1日。当時のこの区間の所要時間は4時間だった。爾来30年。最初の新幹線の車両はとうに引退している。引退した新幹線車両の先頭車と2号車（新幹線は在来線と違って、重量を均分するため、機器等は2両で1セットになっている）とビューフェ車、グリーン車が、交通科学博物館に保存・展示されている。

交通科学博物館は、大阪駅から環状線内廻りで4つ目の弁天町下車、徒歩0分である。実は、展示場の過半は弁天町駅ホームの下を利用しているのだ。別棟になっている大ホールを別として、2階がないのはそのためである。展示場は7室で、他に屋外展示場がある。

第1室は「明日に向かって」と題され、近未来の地上交通機関として期待されているリニアモーターカーの実物、模型によるその推進、浮上実験などを観ることができる。

第2室は、「鉄道の誕生」と題されている。ひと際目立つのは、ワットのベーム式回転複動蒸気機関（模型）が動くさまだ。展示室内には、スチブンスンの蒸気機関車（模型）等々が並んでいる。私には木造の「昔の駅」（駅舎の出札口など）が懐かしかった。

第3室には「鉄道のおいたち」と題して、明治から現代に至る車両の小型模型、切符の変遷などが展示されていた。私には、膨大な事務量を処理するために1923年に輸入されたというパワーズ式統計機械（実物）が興味深かった。

第4室には「鉄道車両のしくみ」と題し

て、現代の電車（221系統電車）の運転のシミュレータ、振子の原理を応用してカーブを高速で通過できるDT型振子式台車（実物）、集電のしくみ、ブレーキ、連結装置などのしくみの他、各種の電車の車両（小型模型）が並び、また子どもたちに人気のある模型電車の運転コーナーがある。

第5室「鉄道の施設としごと」には、CTCと列車の運行、ポイント、信号機、ダイヤ、通信、橋梁、トンネルなどが実物、模型をおりまぜて展示されている。

第6室は「鉄道とくらし」。第7室は「航空・船・自動車のあゆみ」。1950年代に走っていたダイハツミゼット（3輪）、東名高速道路開通と同時に登場したハイウェイバス第1号車、朝日新聞社が使っていた双発のプロペラ機「東風」（以上、いずれも実物）、貨客船の模型などがある。交通科学博物館とはいうものの、鉄道以外の展示があるのはこの部屋だけだ。

壮観は多数の鉄道車両を並べた屋外展示場だ。年代順に言えば、1902年国産の230形のSL（Steam Locomotive蒸気機関車、の略）、1933年製のスシ28形食堂車、D51形SL、マロフネ59形1等寝台車、C62形SL、キハ81形特急用ディーゼルカー、DD13形ディーゼルカー、ナシ20形食堂車がそれだ。つい最近まで現役だったものもある。D51はもうもうと煙をはきながら私が中学生時代に通学に利用した列車を引張っていたものだ。このうちナシ20形食堂車は、この博物館の軽食・喫茶店に活用されている。

交通科学博物館は、1962年に大阪環状線開通記念事業として交通科学館の名で開設さ

れ、1987年の国鉄民営化に際してJ R西日本に移管され、同時に現在の如く改称した。

## 交通博物館

交通博物館は、東京にあり、1921年開設という歴史をもつ。J R山手線の神田駅とお茶の水駅のほぼ中間地点にあり、山手線の高架沿いにある。大阪の交通科学博物館より展示場は広い。年輪の差があるというべきか。

実物展示も充実している。量が多いので、大阪の場合のように、細かく紹介するのはむづかしい。車両関係では1872年に新橋—横浜間に鉄道が開通したときの1号S L、初代の1号、2号御料車（天皇が乗る車輛）、1880年に札幌—手宮間を走っていたS L弁慶号、1881年に上野—熊谷間を走行したS L善光寺号、C57形S L、明治・大正期の客車、普通寝台車客室など。

ここは交通博物館の名に恥じないよう、鉄道だけでなく、汽船、自転車、自動車、航空機関係の展示も充実している。いわば「ノリモノの博物館」なのだ。むろん、北海道と本州をつないでいた青函連絡船をはじめ、汽船はすべて模型である。

自動車としては、国鉄バス1号車、戦時中に動いた木炭自動車などの実物のほか、自動車の発達を追うこともできる（名古屋にはトヨタ博物館の名で知られる自動車の博物館があるけれども、目下のところ、東京とその近辺にはこれに匹敵する博物館はない）。

航空機関係では、航空機の発達過程をしめすパネル、1910年に徳川好敏の操縦で日本で最初に飛んだ航空機（実物）などがある。

いまはJ Rの管理下にあるが元は国鉄が創設しただけあり、さすがに、ここの車両関係の取蔵、展示は充実している。蒸気機関車（S L）関係では、上記のほか、ペリー献上のS L（複製）、日本最初の佐賀藩のS L、伊予鉄道1号S L、などがある。電車関係では国鉄最初の電車、電車の各種編成（模型）のようなJ R（旧国鉄）関係だけでなく、東急、東武、近鉄などの電車模型もある。

ラッセル式をはじめ各種の雪かき車、ディーゼル機関車なども多い。

鉄道関係では、枕木、レールの敷設、橋梁、トンネルの掘さく工事、海底トンネルを掘る方法、信号機のしくみ、ポイントの説明なども展示されている。

連結機、車両用ベアリングなどの機構の展示も行きとどいている。

新幹線関係では、パンタグラフと車両、客室部などがある。既存の物が多いため、大阪のように新幹線の車両その物を展示するスペースはなかったであろう。

展示が充実しているといえれば聞こえはよいけれども、狭いスペースにあまりに多数のモノをつめ込み過ぎている感もある。もう少しスペースがあればと思わざるを得ない。

4階が図書室になっている。あまり広くないし、私が行ったのが日曜日であったためか、職員は訪問者の対応に追われていた。所蔵図書が充実しているからでもあろう。

## 動いているS L

S L（蒸気機関車）は、人気が高い故に、上記の博物館だけでなく、東京の国立科学博物館をはじめ全国各地に保存・展示されている。しかし、今日なお日常的に営業運転し、人を運んでいるのは、多分、大井川鉄道だけではないだろうか。そう、この大井川鉄道はS Lが生きている博物館なのである。

大井川鉄道は、J R静岡から西へ8つ目、金谷を始発駅として、千頭まで39.5kmを運行している。大井川の流れを左、右に見ながら、いまとなつては懐かしい旧式の客車がS Lに引かれてさかのぼるのだ。千頭駅に着けば、S Lの運転台をのぞいてみることもできる。千頭からバスで寸又峡（スマタキョウ）まで行くと、温泉宿がある。

念のためいえば、S Lの運行日は限られているので、S L列車が目的ならば事前に調べて行く必要がある（大井川鉄道株式会社 Tel 0547-45-4112）。